東北お遍路
TOHOKU OHENRO

東北お遍路俳句・写真コンテスト作品集

草の実をつけて巡礼始まりぬ

写真

俳句

梅田正孝

2022

第七回 東北お遍路写真コンテスト

最優秀賞

西山　栄（福島県いわき市）
『海辺でのフラダンス』

新型コロナウィルスの影響で中止になっていたいわき市の海開きが、3年ぶりに開催されました。ここ薄磯海水浴場はメインの海開き会場となり、高校生によるフラダンスなどで来る夏を楽しみにしていました。
（撮影・福島県いわき市薄磯海岸／令和4年7月16日）

優秀賞

佐々木　均（宮城県多賀城市）
『3年ぶりの港祭り』

3年ぶりの港祭り。塩釜神社 表坂202段。
神を迎える人々の風景です。
（撮影・宮城県塩釜神社／令和4年7月18日）

門林　泰志郎（福島県いわき市）
『今年も来ました～応援隊』

富岡町夜の森は今年も桜が満開。恒例の「よさこいひょっとこ連」が演舞に来ましたよ～。夜の森に妖精が登場。　喜びをありがとう～！夜の森の桜。応援をありがとう～！ひょっとこ連。
（撮影・福島県富岡町夜の森／令和4年4月10日）

佳作

庄子　喜一（宮城県名取市）
『網おこし』

ドン・ドドーンと勇壮な太鼓の音が響き渡ります。演奏しているのは閖上太鼓保存会のメンバーです。太鼓の演奏途中で「網おこし」という漁の様子を現した演舞が行われます。網の中には魚がいっぱいです。
（撮影・宮城県名取市閖上／令和4年9月25日）

高橋　達也（宮城県東松島市）
『奥松島銀河鉄道』

東松島市宮戸の復興再生多目的施設「あおみな」に銀河鉄道をイメージしたイルミネーションが設置されました。多重撮影で、蒸気機関車が空に向かって飛び立つように撮影しました。
（撮影・東松島市宮戸／令和4年1月10日）

瀬川　征吉（青森県八戸市）
『次代に羽ばたく蕪島神社・一番札所』

巡礼地一番札所の蕪島神社。大震災後の2015年秋火事で焼失。その後、全国に支援の輪が広がり、無事に2019年に完成！いみじくも今年は蕪島が国の天然記念物指定百年の年。人と鳥よ　永遠に続け！
（撮影・蕪島神社／令和4年3月8日）

村上　美保子（福島県新地町）
『希望の牧場』

福島原発から20キロの牧場。被爆牛には殺処分の命令が出た。「俺は牛飼いだ。殺せるか！11年間、食肉に出来ない360頭の牛を飼っている。牛を飼うことが俺の反原発運動だ！」と彼は息巻いた。震災以前と変わらない風景があった。
（撮影・福島県浪江町／令和4年11月8日）

村上　淳（宮城県気仙沼市）
『潮吹きと龍の松』

あの日の奇跡が生んだ龍の松。すっかり気仙沼の観光名所になった。龍の松よ、昇竜となり岩井崎の潮吹きの力を借りて天に昇って行け。そして海と生きる気仙沼を優しく上空から見守ってほしい。気仙沼は負けない。
（撮影・気仙沼市岩井崎／令和4年7月31日）

丹治　郁夫（宮城県富谷市）
『それぞれの祈り』

3月11日の昼過ぎ、深沼海岸堤防近くにある「荒浜慈聖観音」には、お坊さんがお経をあげ、隣の慰霊碑には中年のご夫婦が静かにそれぞれ祈りを捧げていました。
（撮影・仙台市深沼海岸／令和4年3月11日）

岸　浩子（岩手県陸前高田市）
『高田松原津波復興記念公園献花台』

誰が手向けたのだろう。百合の花が潮風にゆれている。献花台から広い広田湾を見渡す。この海にまだ帰ることが叶わない200人もの人達が眠っている。海と陸の迫の若松の緑と成長が残った私たちにエール。
（撮影・高田松原津波復興記念公園／令和4年6月9日）

庄子　源六（仙台市若林区）
『荒浜避難の丘（鎮魂の風せんとばし）』

毎年行う鎮魂の風せんとばしですが、もしこのイベントの最中に津波の情報が流された時はあの避難の丘に登ろうと思った人も多くいたようでした。その様子が感じられ写真を撮りました。
（撮影・仙台市荒浜小学校／令和4年3月11日）

佐藤　尚子（福島県伊達市）
『百日紅のひとりごと』

今年は見物人がたくさん来たな。コロナなんか何でもない。空から「放射能」が降ってきた時は、驚いたな。町には人がいなぐなったからな。杖をつかせてもらって、もうちょっと長生きすっと。……百日紅のひとりごと
（撮影・相馬小高神社／令和4年7月26日）

市川　清一（青森県八戸市）
『ぼくらの壁画』

1995年7月に大蛇小学校の親子共同で作られた壁画です。2011年大震災にもビクともしないで、今でも訪れる人々を暖かく出迎えています。
（撮影・青森県階上町／令和4年6月13日）

〈 第8回東北お遍路写真コンテスト作品募集！ 〉

■募集テーマ：風景・人物・祭りなど、東北お遍路に因む写真
■応募方法：写真は2Lサイズのプリントで、コメント（100字以内）と一緒にお送りください。写真とコメントで審査します
■応募期間：2023年10月30日（必着）
▶作品の送り先：976-0022福島県相馬市尾浜字南ノ入241-3　東北お遍路コンテスト係

❖ 青柳　健二（写真家）

「東北お遍路写真コンテスト」の趣旨として、写真の説明だけではなく、被写体に対する思いや、そういうことだったのかと気がつかせてくれる写真など、コメントと写真の相乗効果が出ている作品が上位に入ったと思う。震災からようやく復興というときに、今度は新型コロナのパンデミックだ。だから震災やコロナ禍で中断され、ようやく再開された祭りやイベントにはそのうっぷんを晴らすエネルギーを感じる。最優秀賞になった作品は、コメントから、コロナ禍で海開きも中断されていたのだと知る。学生たちもこの3年間、行事やイベントの中止などによって、いい思い出が作れていない。そんな事情を知ると、フラダンスをする高校生たちの姿が特別愛おしくなる。

❖ 結城　登美雄（民俗研究家／東北お遍路創生委員）

東日本大震災の被災地現場をカメラをもって訪ね歩き、そこで出会った人やものや自然などから心に響くものを感じてはシャッターを切り続ける人が、今年もまた多くいるなと感じさせてくれた。今年の応募作品はそうした中で突出したものは少なかったが、写真だけでは伝えきれない思いを短かなコメントで補いフォローし、結果として深みのあるメッセージが見る者の心をとらえ、胸にひびく。そうした作品をながめながら私の心に勝手な思いがあふれる。これまで応募された全作品を一枚残さず一堂に集め展示したら何が見えてくるのか。上手、下手だけではなく、向かい合い、たどり考えるのが東北お遍路の写真の価値なのではないか。しみじみとそう思った。

第六回

東北お遍路俳句コンテスト

黒田 杏子 氏 選評

天

かりがねや三陸の碑に掌を合はす

喜田 明子（兵庫県南あわじ市 九三歳）

はるか淡路島から九三歳の女性が三陸の碑に手を合わせ、祈っておられるのです。俳句は素晴らしいですね。たった一行十七音字、時空を超えて人と人の心、たましいをつないでしまうのですから。喜田さんは玉ねぎづくりの名人。去年から畑の仕事は辞められましたが、農業に打ち込み、句作にも打ち込まれる見事な女性。

地

被災者に休日診療燕来る

半田 里子（宇都宮市 八一歳）

ある日曜日、福島県浪江町の方々数人が歯科の診療を求めてこられた。被災者の方々と知って、診療をしましたとのこと。数人で訪ねてこられたあの方々はその後どうしておられるか。とありました。

人

白河の関の追憶月の夜

多賀 与四郎（栃木県さくら市 八四歳）

月の美しい夜。かつて訪ねた事のある「白河の関」が心に浮かんできたのでしょう。芭蕉と曽良の旅などもいろいろと憶われ、懐かしさがあふれてきたのでしょう。月の秋と留めたところがよろしかったですね。年を重ねるという事は憶い出を楽しむ事もふえるという事ですばらしい事でもありますね。

鈴の音も読経も花も野分だつ

竹内 貴久枝（横浜市 八七歳）

野分だつ夜。作者はいろいろの事に想いをはせているのでしょう。みちのくの被災地の事に心が及んだ時、遍路の鈴の音が聞こえ、亡くなられた方々を悼む鈴の音が静かに胸に響いてきた。という風にうけとめ、この句に共感しました。

届かない手がありました畔青む

森川 雅美（杉並区 五八歳）

詩的な俳句ですね。いろいろな鑑賞ができる句だと思います。津波にさらわれる人に救助の手が届かなかった。その人を深く想っていても想いが伝わらなかった。畔青むという座五の季語のあっせんはよろしかったと思います。希望が感じられる止め方だからです。この俳句賞の拡がりを感じさせて頂いた句でした。

入選

秋の海それぞれ違ふ波を見て　二階堂 光江（盛岡市 六八歳）

菊焚くや浄土ヶ浜の雲厚し　菊地 十音（盛岡市 八七歳）

バリケード越しに経あぐ老遍路　西内 正浩（南相馬市 七五歳）

われらにも死後あり緑立つ海辺　松本 利幸（山口県光市 七三歳）

初夢は皆高台にゐる笑顔　久保 哲也（松山市 六七歳）

津波来し桜ラインにひとり吾　細野 貴子（岩手県矢巾町 六三歳）

お遍路が年に一度の飯を乞う　中平 保志（八王子市 五七歳）

少年になれなかった児蝉時雨　大高 芳子（横浜市 七九歳）

囀や人を生かせし人の墓　小池 亀城（松山市 六五歳）

松の光松の高田へ虹の橋　高山 公平（山口県光市 八四歳）

特別賞

野の風も草も活けたる遍路宿

一本の墓標となりし遍路杖

死ぬために生きてみちのく遍路かな

ただ歩き遍路日記を書き通す

被災地は今も被災地遍路道

口笛を吹きつつ遍路行きにけり　曽根 新五郎（新島村式根島 六七歳）

曽根新五郎さんは、今回も数えきれない名句を寄せられましたが、どれも立派な句でした。この句会をはるばる東京都式根島から支援してくださるご厚情に感謝します。あまりの投句の多さに（編集注・百句ありました）、あえて一句を選ぶことは致しませんでした。ぜひ、特別賞を曽根さんに差し上げたいと思います。また、私は今年から選者料をこの俳句会のために寄附、つまり選者料辞退を決めました。皆様の御健吟をお祈り申し上げます。

二〇二三年一月七日（七草がゆの日）　黒田杏子

選外作品五十句

御詠歌のながるる仮設迎盆　畑 育子（盛岡市 六九歳）

海へ向く復興地蔵雪しんしん　阿部 ゆき子（盛岡市 七十歳）

三月や鎮魂の鐘打ちにゆく　木村 燿子（盛岡市 八八歳）

鮭のぼる震災の町はなやげり　中村 美榮子（盛岡市 八五歳）

捜索の未だに続く盆の波　菊池 節子（盛岡市 八七歳）

十二年振りと祭の大漁旗　伊藤 恵美（盛岡市 六十歳）

父のゐぬ嵩上げの家菖蒲草　十月 小萩（盛岡市 四四歳）

ワンカップ一つ秋澄む師の墓に　及川 智子（盛岡市 五二歳）

浜風やユリの花束献花台　岸 浩子（陸前高田市 六六歳）

大川小語り部永遠（とわ）に鎮座する　阿部 澄江（大崎市 六八歳）

あの日よりこころいずこや遅桜　遠藤 麻紀（石巻市 四九歳）

ひつじ雲　仰ぎ見る空　慰霊塔　須田 光昭（仙台市 六四歳）

蛇穴を出る外海へ汚れ水　中島 吉一（仙台市 七一歳）

声高き避難訓練春埃　柳沼 祥子（仙台市 三八歳）

中浜の寒き屋根裏こえ強し　針生 さよみ（仙台市 六二歳）

泣き叫ぶ海鳥仲間波静か　早坂 ひろ子（仙台市 八四歳）

夏井 いつき 氏 選評

天

三鉄は灼けて車窓はすべて海

久保 哲也（松山市 六七歳）

震災復興のシンボルの一つ、岩手県の海岸に沿う三陸鉄道。「三鉄は」に続く季語「灼けて」の三文字によって、夏の陽射しに灼けつく線路や、車両の帯びる熱や、巻き起こる熱風や、激しく照りつける海岸線がまざまざと映像化されます。車窓から見える圧倒的な海の広がりが、灼熱と対峙しつつ、眼前に迫ってくるようです。

地

丘の墓碑こえて白鳥来たりけり

宮下 征男（前橋市 八三歳）

「墓地」ではなく「墓碑」。震災で犠牲となった方々の墓碑が並ぶ丘でしょうか。そこには、追悼と鎮魂、及び震災の記憶を伝承するための慰霊碑も建っているのかもしれません。その円やかな丘を飛び越え、今年も白鳥が渡って来ました。大海を渡って来た白鳥たちの優美かつ力強い白は、明日への希望の光のようでもあります。

人

語り部の言ひよどむ間や秋の潮

大信田 宏子（盛岡市 七四歳）

東日本大震災の語り部でしょう。あの日の津波や避難生活、復興状況など、震災遺構を案内しながら、自らの震災経験をも語っています。語りの中で思い出した記憶に、思わず言いよどんだ瞬間、その沈黙が聞き手の胸に言葉以上の思いを手渡します。あの津波をおこしたとは思えない秋の潮の音だけが、もの哀しく響いています。

かげろふやここは千年核置場

平子 玲子（いわき市 七五歳）

「ここは千年核置場」を、福島原発という存在の比喩と読みました。この地は、千年先まで「核置場」であったと語り継がれるに違いない、との悲嘆。春の季語「かげろふ」は、廃炉への遅々たる現状と「千年」という時空を繋ぐかのように、揺らぎ続けます。陽炎の先にあるのは一体どんな未来なのか、不安と希望が交錯します。

草の実をつけて巡礼はじまりぬ

梅田 昌孝（北名古屋市 六九歳）

福島県いわき市から青森県八戸市までのリアス式海岸を行く1700kmの東北お遍路の巡礼。慰霊と鎮魂の「こころのみち」には、様々な秋の草が自生しています。出発のその日、くっついていた「草の実」に気づいた作者。巡礼地を巡るこの旅を「千年先まで語り継ぎたい物語」の種を蒔いているように感じたのかもしれません。

入選

浜豌豆渚に砂の戻り来る　豊島 喜美子（宮古市 六六歳）
慰霊碑や父の名札を探す春　古川 制子（盛岡市 五五歳）
盆波の岬ふたりの測量士　二階 堂光江（盛岡市 六八歳）
被災地にこの世の雪が降りにけり　佐藤 広和（仙台市 六〇歳）
夜の森の花と語れば死者のこゑ　達美（いわき市 八七歳）
夜蝉百五十四人の鎮魂碑　森川雅美（東京都 五八歳）
川よりも低く歩みし遍路かな　曽根新五郎（東京都 六七歳）
かなかなや佇むことも許されず　半田良浩（宇都宮市 四八歳）
抽斗の油の燃ゆる春の雪　敏（仙台市 七六歳）
草茂る十一年の通行止め　佐藤尚子（伊達市 六十歳）

避難さき五度かえ友の泣き笑い　宮野 小町（仙台市 七四歳）
夏雲と波音だけの防波堤　高橋 さとか（仙台市 七二歳）
閉上の未来も手繰る地引網　南部 努（仙台市 七一歳）
空澄んで風の電話のいつまでも　笹川 圭子（仙台市 六四歳）
秋風や仮設住宅解体中　齋藤 伸光（仙台市 七五歳）
津波の碑手でなぞりたる秋彼岸　高橋 スミ子（名取市 七五歳）
復興の春特番に友みつけ　平塚 漁市（名取市 七一歳）
余寒の避難所ラジオを回す夜　安部 陽裕（鶴岡市 三三歳）
朝涼し観音めぐる震災忌　武田 本子（東根市 八六歳）
夜の森の青空突くや桜花　中山 輝雄（福島市 七八歳）
久方のなまり飛び交ふ春炬燵　佐久間 静苑（いわき市 八一歳）
暗幕の毛布の一夜子らの無事　伊藤 弘子（いわき市 七五歳）
鎖錆ぶ帰還困難秋の庭　齋藤 美保女（郡山市 六六歳）
原発や泡立草に罪はなし　柳沼 弘（郡山市 八一歳）
あの日より探し続けて烏雲に　小野 トメヨ（新地町 九八歳）
忘るるも忘れぬも大事弥生尽　村上 美保子（新地町 七三歳）
神無月大きな願い小さくし　荒 拓見（新地町 七四歳）

虫も飛ばぬ暑さ更地に伸びる草　新谷 香織（相馬市 六二歳）
今もなお涙止まらぬ東北忌　富田 奈津絵（三春町 四七歳）
原発や海月漂ふ汚染水　森山 恵子（柏崎市 七四歳）
冬ざれの北上沿いの正教会　吉村 りつ子（柏崎市 七十歳）
幾千の声の海鳴り鰯雲　満保 千里（高岡市 五九歳）
鮭颪お遍路どうし膝まじえ　石井 恵子（前橋市 六三歳）
故郷にひびく槎音竹の秋　宮下 征男（前橋市 八三歳）
君が名を呼んでいるよな小鳥来る　星川 双葉 花形 星子（前橋市）
語部の女子高生の声さやか　田代 フサエ（伊勢崎市 八八歳）
夢喰らう獏引き連れて盆の旅　関谷 和江（江戸川区 七八歳）
百千鳥もどさむ蒲生干潟へと　明惟 久里（練馬区 五九歳）
お遍路笠つひに破るる鬼やんま　順矢（日野市 七三歳）
宗任の涙石とぞ落葉積む　伊藤 一泊（横須賀市 八八歳）
洞窟のあはき光や蝉時雨　花瀬 玲（横須賀市 六六歳）
鷹渡る公衆電話朽ち果てて　朗善 千津（松山市 六二歳）
勇魚獲る声溟海へ流されぬ　山内 ひてやん（松山市 五四歳）
相馬より届きし梨の陽の香り　佐藤節美（北九州市 六十歳）

〈 第7回東北お遍路俳句コンテスト作品募集！ 〉■ 題：自由題、ただし東北お遍路に因むもの　■ 応募期間：2023年10月30日（必着）▶作品の送り先：976-0022福島県相馬市尾浜字南ノ入241-3　東北お遍路コンテスト係

【 東北お遍路俳句・写真コンテスト賞品当選者 】● 被災地うまいもの1万円分（2名）俳句の部：喜田明子様／写真の部：西山 栄様　● 被災地うまいもの5千円分（4名）俳句の部：久保哲也様、宮下征男様／写真の部：佐々木 均様、門林泰志郎様　● クオカード千円分（20名）俳句の部：半田里子様、多賀与四郎様、竹内貴久枝様、森川雅美様、大信田宏子様、平子玲子様、梅田昌孝様、菊地十音様、西内正浩様、佐藤尚子様／写真の部：庄子喜一様、村上美保子様、岸 浩子様、高橋達也様、村上 淳様、庄子源六様、瀬川征吉様、丹治郁夫様、佐藤尚子様、市川清一様